

位置と環境

郡元団地遺跡は沖積平野の南端部付近に位置する。東側には鹿児島湾をのぞみ、他の三方は始良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。標高約7mである。

調査の経緯

昭和26年(1951年)に河口貞徳によって発掘調査が行われた。当時、調査区は県立医大構内であったが、現在は鹿児島大学附属中学校敷地内となっている。この発掘調査では住居跡が確認された。弥生時代後期のものと報告されているが、現在の出土遺物の編年観から6世紀代のものと判断できる。昭和38年(1963年)にも、河口によって附属中学校敷地内で発掘調査が行われ、やはり古墳時代の住居跡が確認されている。

その後、昭和50～58年(1975～1983年)には、鹿児島県教育委員会が主体となって、大学校舎建設に伴う調査を行っている。昭和58～60年(1983～1985年)までは、鹿児島大学法文学部考古学研究室が、昭和60年6月以降は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が大学の施設整備工事に伴う調査を行っている。

遺構と遺物

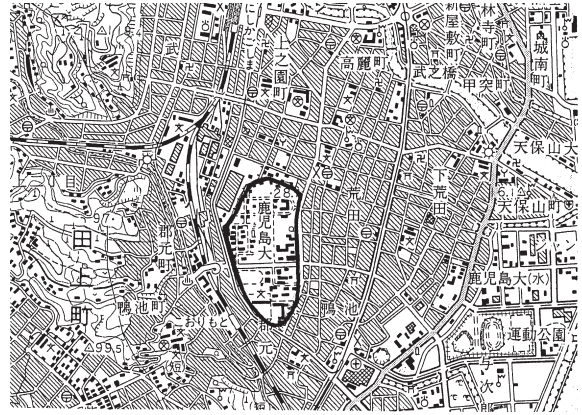
縄文時代の遺構・遺物

縄文時代の明確な遺構は確認されていないが、縄文時代前期から中期の遺物包含層が確認されている。縄文時代の単純層が確認されているのは、一か所で、深浦式・春日式土器に石鏃・石匙・石製垂飾品(写真1)を伴っている。石製垂飾品は球状耳飾の転用品である。写真1



縄文時代の石製垂飾品

別の地点では、古墳時代の住居跡埋土中から曾畑式土器が出土しており、



第1図 郡元団地遺跡群の位置

古墳時代の住居造成時にその直下に存在していた縄文時代前期の包含層を掘削した結果、混在したのと考えられる。

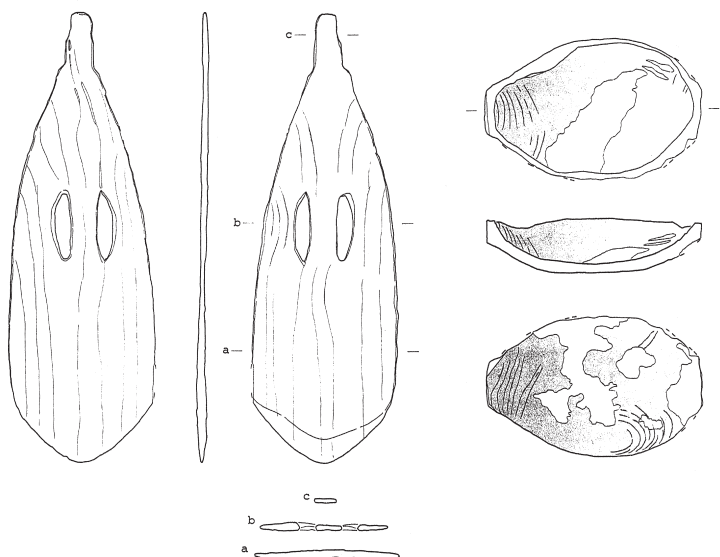
そのほかの縄文時代遺物としては、縄文時代後期土器や晩期の土器が遺跡内から出土しているが、これらのほとんどは弥生時代から古墳時代に流れていた河川跡の埋土中から出土し、非常に摩滅している。

弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構としては、中期以前の水田跡が確認されている。水田跡は、水路と考えられる溝状遺構のほか、稲株痕と考えられている径5cm、深さ8cmほどの多数の小ピットと足跡群が確認でき、その粗密から水田の区画をある程度知ることができる。水田層の土壌をプラント・オパール分析した結果、多量のイネ・プラント・オパールが検出された。水田面は2層に分層でき、下層上面から出土した炭化物の放射線炭素年代測定でB.C.525という年代が得られたため、日本における水田稲作耕作の初期の段階からこれらの技術を導入していたと考えられる。なお、縄文時代中期から後期に形成された泥炭層の



写真2 弥生時代の河川跡から出土した木杭列



第2図 郡元団地遺跡群出土の木製品

中からもイネ・プラント・オパールが検出されており、すでにこの時期から稲作を行っていた可能性もある。

水田跡が確認された150m北側の地点では、河川跡の川底から弥生時代中期の、数百本からなる木杭列が出土した（写真2）。水田のための水利施設と考えられる。同様な遺構は、そこから200m東の地点でも確認されている。当時、遺跡内を東西に横切

る河川が存在していたことが推定できる。

弥生時代の遺物としては、各時期の土器のほか、河川跡の中から木製農耕具や木杭、木製容器などが出土している（第2図）。

弥生土器は、全時期にわたって出土している。他地域から持ち込まれた土器としては、瀬戸内系の後期の甕，北九州を中心に分布する須玖式，肥後地方の黒髪式などが確認されている。須玖式の甕棺の口縁部や、朝鮮半島に分布する無文土器に似た作りのものも出土している。

土器の他は、土製の紡錘車，石包丁，磨製石鏃などがある。

古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構としては、住居跡群、溝と遺物集積遺構が検出されている。住居跡群および溝（第3図）は、3つのエリアに分かれている。6世紀代の住居跡が主体だが、前期の住居跡群も1か所確認されている。

住居跡は、平面形が方形の竪穴住居が主体だが、大きさは1辺が3～6mのものまである。また、壁の一部が細長く飛び出して柄鏡状を呈するものも確



第3図 古墳時代の住居群と溝



写真3 古墳時代の住居跡



写真5 古墳時代の遺物集積遺構



写真4 溝に廃棄された古墳時代の土器



写真6 古墳時代の軽石製品

認められている。基本的に、張り床を持ち、床面に炉をもつ。床面に白砂を薄く敷いているものもしばしば見られる（写真3）。

溝は、幅50cm、深さ50cmほどの小規模なものと、住居群のはずれに位置する幅2m、深さ1.5mほどの比較的大規模なものがある。後者は住居群がある方向から土器などを廃棄した状況が認められる（写真4）。

古墳時代の遺物は、成川式土器と総称される在地の土器が主体を占めるが、須恵器や鉄器も若干出土している。鉄器は、袋状鉄斧、すき先などがある。また、軽石製加工品がある（写真6）。線刻を施しているものや、中央が窪んでいるもの、アワビや船を模しているもののほか、不定形のもので工具に使用したのではないかと考えられるものもある。その他、ガラス小玉、石製勾玉、土製の玉類、石製の紡錘車などが出土している。

古代の遺構と遺物

古代の遺構としては、河川跡と土坑群が確認されている。土坑状遺構は、平面形が円形もしくは楕円

形のもので、中には埋土中に炭が水平に薄く敷かれているものも認められる。埋土中は、9世紀ごろの土師器の破片が出土している。

郡元団地遺跡群から出土した古代の遺物は、9世紀以降の土師器が主なものである。

中世の遺構と遺物

中世の遺構としては、畑跡が確認されている。畑跡は、数百条からなる畝跡が平行もしくは直行して検出され、それと平行して溝状遺構も数条確認された。畝跡直上から青磁片などが出土しているため、中世のものと確定した。

中世の遺物としては、土師器、青磁、白磁、瓦器、石鍋等が出土している。

近世の遺構と遺物

水田跡と土取穴が確認されている。水田遺構は、畦と水路と考えられる溝状遺構、穂積み跡と考えられる直径1m、深さ20cmほどの土坑が確認された。土取穴は、平面形が方形もしくは隅丸方形で一辺1～2m、深さ約1mの土坑がいくつも切りあって検出された（写真7）。土坑の断面は袋状を呈し、そ



写真7 近世の土取穴

の最大径部分は、いずれも白色と黒色の粘土層となっていることから、土取穴と認定した。

近世の遺物としては、陶磁器のほか、寛永通宝、煙管、泥面子などの土製品があげられる。

特徴

本遺跡の特徴のひとつは、弥生時代から古墳時代の水田稲作農耕を行う人々の生活を把握できることである。また、南九州では少ない弥生時代の木製品が良好な状態で出土する。もうひとつは、遺跡が低地に立地し、縄文時代から近世までの埋蔵文化財が連綿と出土することから、縄文海退に伴って陸地化が進むとともに、人間活動がどのように適応しているのかを長期でみることのできる遺跡となっている。

資料の所在

昭和28年と38年に河口によって発掘調査された出土遺物は、河口宅に保管されている。

昭和50年から以降の出土遺物は、鹿児島大学郡元キャンパスに保管され、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が管理している。

参考文献

河口貞徳1955「医大住居址」『鹿児島のいたち』
鹿児島大学埋蔵文化財調査室1986『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』I

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1990『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』V

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1991『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』VI

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1992『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』VII

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1993『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』VIII

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1996『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』11

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1997『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』12

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1998『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』13

鹿児島大学埋蔵文化財調査室2000『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』15

鹿児島大学法文学部1992「南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究」『平成3年度教育研究学内特別経費研究成果報告書』

鹿児島大学埋蔵文化財調査室1994『鹿児島大学構内遺跡郡元団地L-11・12区—鹿児島大学稲盛会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

(中村直子)